

# 太宰府の文化財

450

## 史跡指定1000年国分瓦窯跡

本年は国分寺跡とともに国分瓦窯跡が大正11（1922）年10月12日に国の史跡に指定されて1000年です。

国分瓦窯跡は国分4丁目に隣接する新池のほとりにあり、丘の斜面を窯の幅で掘り下げ、その中に日干しレンガをアーチ状に組み上げてつくった登窯で、高さ1.5m、間口1.5m、奥行5.5mを測ります。指定



国史跡 国分瓦窯跡  
(中央奥の白い標柱の左側地下に保存された瓦窯跡があります)

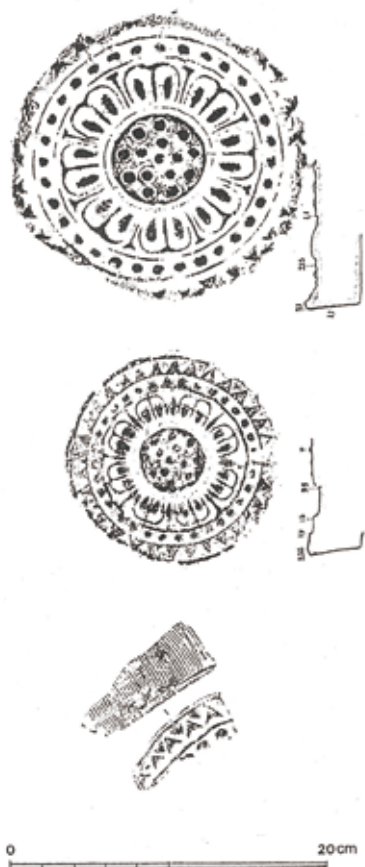


アーチ状に組まれた日干しレンガの窯の壁  
(「太宰府の文化財」太宰府町1968年より)

時点では農業用の池の斜面に2基の瓦窯が露出した状況で、池の満水時には窯の上のレベルまで水位が上がリ、窯の東側脇には池に注ぐ仕掛水路があったため農事のための池の給排水により窯が自然崩壊する状況であったようです。昭和2（1927）年度の工事により石垣の壁で水を受け、その内側で地面に露出した窯跡が見学できる形になっていました。その後、窯の風化や劣化が進んだため遺構を保護するために埋め戻され

ました。これまでの県や市による調査でこの場所での瓦窯は9基以上が並んでいたことが指摘されています。このほか大宰府で複数の瓦窯があるのは都府樓北瓦窯跡で2基（平安時代）、来木（蔵司）瓦窯跡で9基（平安時代）、来木北瓦窯跡で2基（平安時代）、松倉瓦窯跡で3基（平安時代）、般若寺瓦窯跡で5基以上、国分松本8次調査で2基（奈良時代、平安時代）であり、国分瓦窯跡は大宰府の瓦窯としては最大級の規模であったといえます。

も主要な瓦生産施設であったといえます。国分寺の瓦もこの窯で焼かれた可能性がありますが、創業は国分寺より古く、製品の供給先としては大宰府政庁周辺の官衙（役所）や大宰府内の寺院などが考えられます。奈良時代の平城京の瓦は京域の北にあった奈良山丘陵など1km以上離れた場所で作られ、東北の多賀城跡では25km離れた北方の大崎平野というところで生産したものが運ばれて使用されています。これら他所との比較から、国分瓦窯は消費地に極めて近い場所に営まれた瓦窯だったこともわかります。



焼かれた瓦は奈良時代のはじめから平安時代までのもので、大宰府の瓦窯の中では最も長い間操業であったことが知られています。窯の数や操業期間から国分瓦窯跡は大宰府で

文化財課 山村 信榮

出土した奈良時代の軒瓦  
(「筑前国分寺」鏡山猛『国分寺の研究』  
角田文衛編1928年より)

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198  
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
✉ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします！



広報だざいふ 2022.11.1 (令和4年)